

## 復活節第六主日

2010.5.9

(ヨハネ 14・23-29)

復活祭の喜びを祝って来た復活節も今日はその第六主日で、来週は主の昇天の祭日を迎えます。この復活節の間、私たちはイエスがそのご生涯の最後に弟子たちに残されたことばを、あらためて味わってきました。主日ごとに朗読された福音は、ヨハネ福音書に記されているイエスが弟子たちに残された長い遺言の一部分、一部分だったので、ミサの中で聴くだけでは、私たちにとって分かりづらいところがあったかもしれません。御父のもとに昇られる主のことばに従って、聖霊の降臨を待ち望んで祈った弟子たちのように、私たちも聖書を開いて、イエスが残された最後のおことばの全体に、あらためて心を向けることが出来たらと思います。

あの別れの時、イエスは弟子たちの上で起こることを、前もって語り聞かせておられたのです。今日の福音の最後のところを見ると、「事が起こったときに、あなたがたが信じるように、今、その事の起こる前に話しおく」とイエスは言われています。聖書と典礼の下に書かれた注を見ると、「事が起こったとき」の事とは、イエスの十字架の死と復活という出来事を指していると説明されています。それらの事が起こったときに、それはイエスが前もって告げておられたことであつたと、弟子たちが信じ、受け止めることが出来るように、イエスはあの最後の別れに当たってのことばを残されたとヨハネ福音書は記しているのです。そのように理解するなら、「わたしは去って行くが、また、あなたがたのところへ戻って来る」とあの時イエスが言われたのは、ご自分の十字架の死と復活を告げておられたのだということが分かります。そして、「わたしを愛しているなら、わたしが父のもとに行くことを喜んでくれるはずだ」というおことばは、死者の中から復活されたイエスが御父のもとに行かれること、つまり来週、私たちが祝う復活されたイエスの昇天を告げていると理解することが出来ます。

このように見てくると、洗礼を受けてイエス・キリストを信じる者とされた私たちは、十字架の死を前にしたあの時、イエスが語られることを理解できずにいた弟子たちと同じ条件の下に置かれているのではないことが分かります。私たちは聖霊の降臨を受けて弟子たちが始めて理解することが出来た、あの時のイエスのことばが何を語っていたかを、私たちが受け入れた教会の信仰によって知っているのです。そして私たちが受け入れたその教会の信仰は、今日の福音の中でイエスが弟子たちに、「弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごと

とく思い起こさせてくださる」と告げておられたとおりに、聖霊の降臨を体験することによって、弟子たちが悟ることの出来た、イエスのあの最後のおことばに基づいているのです。教会が信仰の書として、私たちに伝えた聖書を最後まで読むとき、私たちは、イエスの十字架の死と復活、さらにその昇天と聖霊降臨の出来事は、あらかじめ、あの最後の別れのことばによってイエスが弟子たちに告げておられたことであることを知るのです。

そのようなイエスのことばの一部として、今日の福音にあらためて耳を傾けたいと思います。「わたしを愛する人はわたしのことばを守る」とイエスは言われます。イエスが「わたしを愛する人は、わたしのことばを守る」と言われた時、イエスはどのおことばを指して、「わたしのことば」と言われたのでしょうか。少し前の箇所では「あなたがたはわたしを愛しているならば、わたしの掟を守る」と言われているので、わたしのことばを守るというおことばは、イエスが与えられた新しい掟、「互いに愛し合いなさい」という掟を指しているとも受け止めることが出来ます。けれども、「わたしを愛する人は、わたしのことばを守る」とイエスが言われるとき、ことばを守るという言い方には、掟を守るというときよりももっと広い広がりを感じ取ることも出来ます。

今月は聖母月でもあるので、マリア様のことを思いおこすと、マリア様は天使のお告げを通して受けたことばを心に納め、思い巡らしていたといわれています。「わたしを愛する人は、わたしのことばを守る」とイエスが言われるとき、聖母がそうされたように、イエスのことばを心に納め、思い巡らすことが、イエスのことばを、私たちのうちに守ることなのではないでしょうか。さらに、「わたしを愛する人は、わたしのことばを守る」と言われるとき、それは、イエスが語られた一つ一つのおことばを、大切に忘れないように、私たちの中に留め、守るということ以上のことをイエスは言われておられるのかもしれない。イエスがここで「わたしのことば」と言われる「ことば」は複数のことばではなく、ただ一つのことばとして表現されています。そのことにこだわるなら、「わたしのことばを守る」とは、ヨハネ福音書の最初に語られている、肉となって私たちの中に住んでくださった、神のもとから来られた神のみことばとしてのイエス・キリストのすべてを、私たちの中に、決して忘れることのないように守り続けるということでもあるのではないのでしょうか。

そのように受け止めて、あらためてヨハネ福音書の最初に語られていたことを思い巡らしてみると良いかもしれません。そこでは、はじめに神とともにあった、神そのものであることばは、世に来て、世の暗闇を照らす光であり、いのちのことばであると言われています。さらに、そのことばを世もその民も受け入れなかったが、「ことばは自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子とな

る資格を与えた。この人々は神によって生まれた」と言われています。ここに語られていることは、私たちがイエスのみ名を信じて洗礼を受けたことによって、いただいている恵みそのものです。弟子たちの上に注がれ、弟子たちの心を開いて、イエスが語られたことをすべて理解させてくださった聖霊、今も教会の中で働いておられる聖霊は、私たち一人ひとりの心をも開いて、私たちが神の子とされるこの恵みを与えてくださったのです。

「わたしを愛する人は、私のことばを守る。私の父はその人を愛され、父と私はその人のところに行き、一緒に住む」という、今日の福音のイエスのおことばは、最初聞いたときには、すぐに理解することが難しいかもしれません。けれども、今日の福音のイエスのこのおことばは、私たちが洗礼によっていただいた、神の子とされた者たちのいのちの恵みを告げることばなのではないでしょうか。私たちが、神のことばとしてのイエスが私たちに与えてくださったこの恵みを私たちの心に保ち続け、守り通すことが出来る時、私たちはイエスが約束された平和を味わうことが出来ます。

今日の福音の中心でイエスは「わたしはあなたがたに平和を残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを世が与えるように与えるのではない」と言われます。世が与える平和は、平和が維持されるように、平和のための条件を整えようとします。戦争の抑止力としての平和を追求します。そして、しばしば、そのことが人々の平和な暮らしを脅かします。イエスが与える平和は、「あなたがたに平和」と弟子たちに言われた、復活の主イエス・キリストが与えてくださる平和です。どのような状況に置かれても、私たちの中にもともに住み、ともにいてくださる、父なる神とその父を指し示す、神のことばとしてのイエスによって私たちにもたらされる平和です。イエスが約束してくださるこの平和を生きるために、私たちに与えられた神のことばとしてのイエスを、そのイエスが私たちにもたらす神の恵みを、私たちの中に大切に大切に守り通して行きたいと思えます。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高